

きほく通信

第88号
令和3年
10月7日
発行

難病
患者家族会
きほく

【会長】 神森 和子
紀の川市中三谷
【相談室】 0736(75)4413
【事務局】 〒649-6612 紀の川市北涌371
森田方 10736(75)4413

お伺い申し上げます

事務局



10月とは言え、日中の気温は真夏並みの日もあり気温差の影響で体調を崩していませんか？

昨年からのコロナ禍で外出はなかなか通院さえも制限されるような状況が続きましたが、ここに来て新規感染者の急減もあり、リハビリや散歩なども感染に気をつけながら再開したいものです。

また療養の傍ら、お気に入りの趣味などにも取り組んでいきたいと思えます。そこで、以前神森和子会長から届いた紙面をご紹介致します。

『吟詠興道』第66号「和歌山県本部」投稿

「心で聴き心を添えて心で吟ず」

打田吟詩会 神森和子

昭和57年、仕事で立ち寄った銀行で、支店長から「神森さん詩吟習いませんか」の一言が、関心流道吟詩会との出合でした。

「是非こゝ緒させて下さい」と即答したものの、胃を摘出の大手術を受けている為に体力は半減、家事、仕事はもちろん二人の子供は小さい。

夫の両親の介護、加えて趣味も可能であろうか？いいえ私にはもっと大きな不可がある。



私の耳には音が無いのだ。「声楽」の勉強をしていた20才のころ、メニエール氏症候群による難聴と診断された。当時は病名すら無かった時代。かすかに左の聴力が有るだけ。「耳で聴き、心で吟じる」そんな詩吟を私は出来るだろうか。ご指導下さる先生に失礼ではないだろうか。

「現在の医学で出来得る全ての治療は試みました。あとは、貴女自身の精神力との闘いです。しっかりと生きて下さい」と退院時見送ってくれた東北大附属病院教授の言葉を思い出し、決断をした。不安を抱えての出発でした。暗雲はすぐに追いかけてきました。

十年間勤めた会社が倒産、転居、新しい職場での不安。夫の両親の介護は7年を過ぎ、いつしか吟ずることが遠くなっていきました。

16年の空白を経て「打田吟詩会」へ入会。そこで最高の師、加藤芳瑩先生のご指導を仰ぐこととなり楽しい月日が過ぎました。

がしかし病気の後遺症は意地悪く「胃摘出」から40年、医師は「栄養が半分しかとれないので不都合が出てきています」と。



現実「腸」が胸のところに、「骨」がもろくなり、「首」は下を向いたまま、「食道」は開いたまま何んとも気分が悪い。加えて23年に及ぶ「両下肢皮膚潰瘍」で包帯でぐるぐる巻き、かすかに残る聴力も元気なく、再び退会に至る。

一人家で吟じる日々でした本年8月(当時)、松

井会長と病院で再会。再び吟界に快よく受け入れて下さった。

*

軍人であった厳格な父が、尺八を吹き、三味を弾き、吟じ、謡い、舞った。

遠い日に、何事も心を添えて、言葉を添えてが口癖でした。思い出します。



私も「心で聴き」「心を添えて」「心で吟じます」体力、声の続くかぎり。



〈絵 神森敦子さん〉